

友達と協同して遊ぶことを楽しむ幼児を育てる

～幼児同士がつながるための環境の構成～

港区立芝浦幼稚園

園長 青山 伸子

1 主題設定の理由

本園は、高層マンション等に居住し、核家族家庭の中で育っている幼児がほとんどであり、入園前から家族以外の人と関わる経験が少ない傾向がある。園内研究を進めるにあたり協議する中で、友達への関心はあるものの関わり方が一方的であったり、自分の思いを表し伝える際に教師に頼ったりなどの幼児の課題が出され、昨年度から人との関わりに視点を当てた研究を進めている。

昨年度は、幼児が自分の思いを実現させ、友達と思いがつながるための環境の構成を研究してきた。各教師が、幼児同士の思いや行動がつながるための環境の構成を考え、時期に応じた環境の構成の工夫を表にすることで、保育内容の充実などの成果が見られた。一方で、一人ひとりが思いを相手に伝えるための幼児の成長には、個人差が見られ、「つながり」を深めた上でさらに「協同性」に着目することで幼児同士の思いや行動がさらにつながるのはないかと考えた。そこで、今年度は協同して遊ぶことを楽しむための幼児を育てることを目的に、環境の構成をさらに探っていくこととした。

2 研究のねらい

発達段階に応じた幼児同士がつながる姿を育むための環境の構成を探り明らかにする。

3 研究の内容

- ①「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つである協同性についての参考文献や先行研究を読むとともに、本研究における「友達と協同して遊ぶ姿」について教員間で共通理解する。
- ②保育の中で、幼児同士が関わりつながりをもっていると思われる姿の事例を検討し、発達の時期ごとの「友達と協同して遊ぶ姿」について協議したり、幼児の「友達と協同して遊ぶ姿」を育む環境の構成について分析・考察したりする。
- ③昨年度から作成している各学年の『幼児同士がつながるための環境の構成の工夫についての表』の内容について協議し、作成した表に基づいた保育実践を行い環境の構成と幼児の変容を検証する。検証した内容により、表の修正・加筆を行う。
- ④各学年の研究保育・研究協議会に外部講師を招聘する。指導・助言をいただき、研究のねらいと育てたい幼児像に向けた環境の構成について学びを深める。

4 『幼児同士がつながるための環境の構成の工夫についての表』について

昨年度の研究から継続して、「友達と協同して遊ぶ幼児の姿」を教員間で共通理解するために具体的な幼児の姿や「友達と協同して遊ぶ幼児の姿」を育むために必要な環境の構成（教師の援助・ものや場）を出し合った。協議を重ね、表を踏まえた事例の検討や研究保育を行い、時期や発達

段階に応じた環境の構成の工夫をまとめたものが『幼児同士がつながるための環境の構成の工夫についての表』である。

『幼児同士がつながるための環境の構成の工夫についての表』の一部抜粋

幼児の姿	幼児同士がつながるための環境の構成 ●人（教師の援助） ☆ものや場
4歳前期 4月～10月頃 なかよしになる会 誕生会 いもほり	こいのぼり 親子遠足 プール 七夕 お月見 運動会
<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いをどのような言葉にしたらいかが分からない。 「いれて」「かして」など遊びに必要な簡単な言葉のやり取りができる。一方で、いざこざがある。 友達に自分の思いを伝えるのが難しく、困った様子でいたり、教師に言ったりする。 気の合う友達と一緒に遊んで楽しい。（この子と一緒にだから楽しいという安心感がある） 友達と同じものを持ったり、同じ動きをしたりするのが楽しい。 大まかな遊びのイメージが共通になって遊べるのが楽しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 相手に伝わりやすい言葉や言い方を伝えたり、モデルを示したりする。 大まかな遊びのイメージの中で、数人が一緒に遊んでいても、その中で個々のしたいことに寄り添ったり受け止めたりする。動きを言葉にする 遊び方やイメージをつなげる言葉を教師が言えるとうい「赤ちゃん寝ているのね」「ドアはこちらから入るのね」 教師が遊びの仲間になることで、「この場にいる友達と一緒に遊ぶのが楽しい」と感じられるよう意識して関わる。 その場に居合わせた友達と遊びを楽しめるように、幼児の関係性を捉えながら、教師も遊びの仲間になる。 自分の思いを出し始めてきた幼児、まだ自分の思いを出すことに緊張がある幼児には、個別に教師が受け止めたり、共感したりする。 自分の思いをよく出す幼児、一方的に話すのみの幼児には、教師が「○○ちゃんは知っているかな?」「○○ちゃんに言ってみたら?」などと、友達の存在にも気付けるような声掛けをする。 トラブルの場面では、互いの思いを受け止めたり代弁したりし、相手にも思いがあることに気付けるようにする。 <p>☆広告紙を丸めた棒・紙テープ・お面バンドなど→友達と同じものが簡単に作れて、仲間意識をもてるものにする。</p> <p>☆遊びの場の調整・降園時での遊びの紹介→友達がしている遊びを知ることができるような遊びの空間作りをする。</p> <p>☆場の再構成→遊びに新たな刺激を入れたり、新しい遊びへ向かったりするきっかけ作りをする。</p>

上記の表に基づき行った研究保育（4歳児6月）の指導案の一部抜粋

友達や教師とやりとりをしながら遊ぶ楽しさを感じながら遊べるように（アイス屋ごっこ等）

- 教師は幼児の様子に応じてお客さん役やお店屋さん役になり、言葉（味、カップかコーンか、おすすめなど言う／尋ねる）や動きのモデルとなるようにする。
- アイスは、幼児のイメージに合わせて複数種類作れるよう材料や用具を準備する。

遊んでいる幼児同士で大まかなイメージを共有しやすくなるように（警察ごっこ等）

- 家のドア、車のタイヤやハンドル、身に着けるもの（警察の帽子、ベルトなど）看板それぞれの遊びの場で何をしているかが分かりやすくなるような教材を準備する。幼児が自分で作ったり飾ったりする余地を残し、イメージを実現して作ることを十分に楽しめるようにする。



5 事例（エピソード記録）

幼児の発達段階を踏まえた『幼児同士がつながるための環境の構成の工夫についての表』に基づいた保育を実践し、日頃の保育のエピソード記録や研究保育時の記録を持ち寄り、環境の構成などについて協議、検証した。その中の一部が以下の3事例である。

(1) 3歳児5月 ダンゴムシのおうち

①○幼児の実態 ●教師の願い

○園生活に慣れ、自分のしたいことができることに喜びを感じている。

○遊びの場に居合わせた友達がしていることに興味や関心をもっている。

●安心して園の中で自分のしたい遊びを見つけ取り組んでほしい。

●教師や居合わせた友達と一緒にいることを心地よく感じてほしい。

②エピソード

ダンゴムシのおうち→



2人で板を運ぶA児とB児。教師が「何を作るの?」と尋ねると「ダンゴムシのおうちだよ。」とA児。教師は「じゃあこのあたりをお家にしようか。」と保育室のテラス前にビールケースを運び、板とビールケースで場を作れるようする。A児はダンゴムシを捕まえてくるとその場で、板の上を歩かせてみたり、じょうごを使って上からのぞいたりしている。近くにいたC児とD児もダンゴムシが歩いているのをじっと見たり、皿に乗せて歩かせたりしている。C児は自分ではダンゴムシを捕まえてこなかったが、友達が見ているダンゴムシの動きを一緒にじっと見ている。D児はしばらくダンゴムシを見た後に、テラスに置いてある自分の入れ物を持ち、教師に「ダンゴムシみつきたい」と言う。教師は「みつきたいのね。A児、B児がいるところにダンゴムシいるかな。行ってみようか」と言い、一緒に粗朶（そだ…生き物呼び込む場として落ち葉や切った樹木を束ねたものを置いている場所）に行き、木や葉、土を触りながらダンゴムシを探す。D児の「ダンゴムシいたよ。」という声の方を見て、教師は「ほんとうだ。かわいいダンゴムシだね」と笑顔で答える。その様子を見ていたA児が「赤ちゃんのダンゴムシだよ。小さいもん」と話し、教師は「そうなのか。赤ちゃんなのか」とつぶやく。その後、A児とB児、D児はダンゴムシを粗朶に探しにいって場に戻りダンゴムシを板にのせることを繰り返す。

③考察（下線を中心に読み取ったこと・協議したこと）

○ダンゴムシのおうちを作りたいというA児とB児の思いが実現するように援助したことにより、その場を遊びの拠点としてダンゴムシとの関わりを楽しむことができた。また、居合わせた幼児が自分の興味に応じて自分なりの楽しみ方をしていた。

○教師が幼児の姿を見守りながら思いを受け止める、同じような動きをする、笑顔で応えるなどの援助によって、同じ場にいる幼児がしたいことを楽しむことや一緒にいることを心地よいと感じることにつながった。

(2) 4歳児4月 園庭での味噌汁づくり

①○幼児の実態 ●教師の願い

○自分なりに遊びのイメージをもち、つमりの動きをすることや見立てて遊ぶことを楽しんでいる。

○遊びに必要なものや場所を自分なりに作っている。

●イメージをもって動いたり見立てたりする中で友達との関わりを楽しんでほしい。

●思いを自分なりの言葉や動きで教師や友達に伝え、友達と同じように動いたり見立てたりする楽しさを感じてほしい。

②エピソード

砂場でE児とF児とG児が各々の鍋に砂や水を入れたり、とってきた草をままと遊具の包丁で刻んだりしている。鍋に刻んだ草や拾い集めた木の葉を加えておたまでかきまぜることもしている。近くを通った教師にE児が「味噌汁できてきたよ。熱々だよ」と言う。教師が「おいしそうだね。何が入っているのかな。」と言うと、F児が「ほうれんそうとねぎだよ」と答える。E児は「ぼくのは、豆腐の味噌汁」G児「わたしはお豆腐とワカメ」と言う。教師が「ああ、いいに

おい。後で食べにこようかな」と言うとF児は「いいよ。たくさん作ってるんだよ。今日はパーティーするから」と言う。約15分経つと、途中で遊びを離れたE児が砂場で山を作って遊んでいるH児と一緒に山をつくり始めた。そのあとに、I児が遊びに入ってきて、E児が使っていた鍋やおたまを使い始めた。その様子を見ていた教師は、E児は遊びから抜けたと思っていたため、E児やI児に声を掛けることはなかった。しばらくすると、E児が、「よーし。みそ汁パーティーの準備しなくちゃ。」と言いながら遊びの場に戻ってきた。E児が使っていた鍋などをI児が使っているのを見ると「え、ぼくが使ってたんだけどな。」と言う。遊びの場にやっ来ていた教師は、その言葉を聞き、E児が遊びから抜けたと思っていたためにI児が使い始めたことを伝えた。教師が「E児も一緒に作ろう」と誘うが、E児は「ま、いつか。」と言って他の遊びに場に行った。

③考察（下線を中心に読み取ったこと・協議したこと）

○鍋やおたまなど友達と一緒に同じものを使うことや、使いながら同じような動きをすることが遊びの楽しさにつながっている。遊びの興味や時期によって遊具の必要数をよく考えることが大切である

○味噌汁を作って遊ぶという大まかな遊びのイメージをもち一緒の場にはいるが、楽しんでいることはそれぞれである。教師が遊びに加わりながら、個々の幼児のしたいことを丁寧に読み取り言葉で表したり教師自身の楽しんでいることを言葉や動きで示したりすることで、より遊びや友達との関わりの楽しさがふくらむと思われる。

○遊びの場を離れたので遊びをやめたという判断をすぐにするのではなく幼児の思いを確かめ友達にも伝える必要があった。遊びの拠点となる場を保障することが大切である

(3) 5歳児7月 宇宙船ごっこ

①○幼児の実態 ●教師の願い

○数人の友達と思いを表しながら遊ぶことを楽しんでいる。

○互いの思いや考えが友達とぶつかり、遊びが停滞することもある。

●友達と遊びのイメージを共有して一緒に遊びを進めることを楽しんでほしい。

●自分の思いや考えを友達に伝えるとともに、友達の思いや考えも聞きながら一緒に遊びを楽しんでほしい。

②エピソード

J児・K児・L児・M児はホールでパネルや段ボールなどを使って宇宙船を作っている。J児「かっこいいハンドル作ろうよ」という提案に、K児は「かっこいいってどんなの」と聞く。J児は「本物みたいってこと」と答え、K児・L児・M児は「そうだね」「いいね」「かっこいいの作ろう」と言う。K児が「図鑑があるといいんだよ」と言い絵本コーナーから宇宙の図鑑を持ってくる。持ってきた図鑑を4人で見ながら、J児が「これだ。このハンドル作ろう」と言う。他児も「そうだね。作ろう」と言い、材料置き場から各々がペーパー芯やカラーテープを持ってくる。作り始めようとするとうJ児が「ハンドルは1個だよ。いっぱい作らないんだよ。一個あればいいの。」と言う。L児やM児は「図鑑のは1個じゃないよ。」「運転する人一人じゃないよ」とJ児に向かって言い、L児とM児は「えー何だよそれ」と不満そうな声をあげ、K児は何も言わず困ったような表情をしている。その様子を見ていた教師は、どういう状況なのかそれぞれの幼児から話を聞く。その後、「J児・K児・L児・M児は、かっこいいハンドル作りたいってことはみんな同じだね」と話

したり、K児にも意見も聞いたりした。K児は「1個じゃなくていいと思うけど、4個は要らないかな。ハンドルの他の機械ができなくなる」と言う。それを聞いて、L児は「ハンドル作る人、機械作る人って分かれるといいかも」J児は「ハンドルは1個でもいいのかな。どうする。」などとさらに自分の考えを言ったり友達に聞いたりする。教師は「いろいろなやり方があるね。4人で考えるといいんだね。」と伝え、相談の様子を見守る。4人は2人が一つずつハンドルを作り、後の2人が一緒にハンドルを取り付ける機械を作ることを決めた。

③考察（下線を中心に読み取ったこと・協議したこと）

○4人で共通のイメージで遊んでいるが、遊びを進める中で幼児同士のやりとりで伝えきれないことや、異なる思いや考えが出された際にどのようにしたらよいか幼児だけでは分からないことがある。教師が関わりながら、確認したり言葉を補ったりすることが必要である。

○この時期、幼児同士で思いや考えを伝え合うためには、場面や状況に応じて教師が橋渡しや仲介をすることが大切である。伝え合いの姿を十分に育むことで、
友達のことを受け止める姿につながっていく。 宇宙船ごっこ→



6 まとめ

(1) 研究を通して分かったこと・成果

①幼児が友達と遊ぶことを十分に楽しみ、目的の実現に向けて友達と一緒に考えたり協力したりするようになるためには、教師や友達から受け止められる経験を積み重ね、安心感や信頼感を得て、自己発揮や自己抑制をできるようにしていくことが必要であると分かった。

②『幼児同士がつながるための環境の構成の工夫についての表』の作成を通して、友達との関わりが深まる過程や協同性につながる幼児の育ちの姿をとらえることができた。

③研究保育や事例の検討において対象学級の幼児の実態を全教員で共有し、活動のねらいや幼児に経験させたい内容、それに伴う環境の構成などを教員全員で協議したことで、ねらいに応じた環境の構成の方法や指導内容をより具体的に学び、指導の改善につなげることができた。

(2) 今後の課題

①友達と協同して遊び友達との関わりを深めていくための、より具体的な指導内容・環境の構成を長期の指導計画に位置付けで実践し、保育の質の向上を図っていきたい。

②幼児が協同して遊ぶ中で経験していることや幼児期の人との関わり的重要性を具体的に分かりやすく発信し、地域の保育園や小学校・中学校・保護者・地域の方とともに幼児の人と関わる力を育てていきたい。

港区立芝浦幼稚園 山田 裕子 清水 佳那 五十嵐 美巳 倉田 史織 岡本 めぐみ 蔵原 真理子

選定委員より<この論文の「よさ」について>

★目標となる具体的な児童の姿を明確にするとともに、共通理解を図るために表として見える化した点が大変すばらしかった。

★幼児に積極的に関わろうとする教師の熱心な姿勢が伝わります。

★「幼児同士がつながるための環境構成の工夫についての表」を作成し、全教師が幼児の関わりについて共通理解を図り保育を行い、その成果課題を共有して、保育の改善に努め質を高めていること。

- ★教師の言葉がけの 大切さに着目し てん幼児同士の繋がりを促すための援助を表化している点。
- ★「環境の構成の工夫について」の表とそれに基づく成長段階（3・4・5 歳）の事例と記録から研究と実践の結びつきを感じられる点。

表は汎用性がある。